論評（3）

平岡　公一（お茶の水女子大学）

〔研究ノート〕香川　重遠「ロバート・ピンカーの福祉多元主義論」

この論文で取り上げられているロバート・ピンカー（R. Pinker）は，イギリスの学界でリチャード・ティトマス（R. Titmuss）の後継者ともいえる位置にあった研究者であり，その代表作であるSocial Theory and Social Policy, The Idea of Welfare, およびその他の著書，論文により長きにわたってイギリスの学界をリードし続けた社会政策学者である．

ピンカーは，福祉多元主義を主要な研究テーマとしているわけではなく，福祉多元主義に基礎づけられた制度改革の積極的な推進者ではなかった．しかし，福祉多元主義と，それに基礎づけられた改革についての分析・評価は，社会政策に関わる理論状況や，政策動向に関する彼の論文のなかでしばしば行われてきたし，来日しての講演の折にもそれらの点に言及することがあった．ところが，これまで福祉多元主義についてのピンカーの分析や評価については，日本の研究者による体系的に検討は行われていなかったのである．

本論文は，この主題を始めて取り上げたものであり，主に1990年代以降に発表された論文において福祉多元主義に関してピンカーが展開している議論を，内在的かつ綿密に検討し，ピンカーが，福祉多元主義について，福祉国家・社会政策についての自らの理論と関連づけて，多面的な考察を行い，独自の見解を表明していることを明らかにしている．

本論文によれば，ピンカーの福祉主義論の特質は，第一に，「制度モデルよりの福祉多元主義」の擁護，第二に，複数イデオロギーが共存する中道としての福祉多元主義の必然性の主張，第三に，福祉多元主義と市民権の関係性の理論的説明という点に求められる．これらの論点は，福祉多元主義に関する日本での議論では，ほとんど取り上げられなかった点である．本論文のこのような指摘は，イギリスでの福祉多元主義をめぐる議論の視野の広さや理論的考察の深さを知る上でも有効であろう．

評者は，さらに①福祉多元主義についてのピンカーの見解は，ソーシャルワークやインフォーマル・ケアについての彼の見解とどのように関連しているのか，②福祉多元主義に関するイギリスの他の研究者とピンカーの見解の共通点と相違点はどこにあるのか，③福祉多元主義についての彼の見解は，政策と理論をめぐるイギリスの特殊な状況を反映したものなのか，それとも，かなりの程度，普遍性を持つものなのかなどの点に関心を覚えた．